気になる始まりと気づかぬ始まり

利島　保

「始まり」この言葉を耳にすると、私は気になってしょうがないことがたびたびある。というのも、私にとって「始め」という言葉から連想することには、どうもいい感じのものがないからである。

多分、小学校三年生ごろからだと記憶するが、始業式が終わると、早く夏休みがこないかな、早く日曜日にならないかなと思い続けて学生時代を終わったし、教職についた現在でも、その気持ちはいっそう変わっていないのである。なんとものぐさな人間であろうかと、われながら驚くくらいである。なぜ私がこんな気持ちをもつようになったのかをつらつら考えたのであるが、私のパーソナリティの悪さを第一とすると、第二の原因は、始まることの終わった瞬間から、その後に続くいろいろな苦痛を予測し、それを避けたいと思う気持ちが働くからであろう。だから、始まるまでは、始まることを楽しみに待ち、始まるとすぐ新たな苦痛を感じるのである。たとえば、私にとって大晦日（みそか）や土曜日の夜、始業式の前日はなんとなく心がおどり、新たな気分で来る日に臨みたいと思うのである。しかし、始まればその気持ちはどこかへ霧散してしまうのである。

人間生活を少しでも続けると、始めが始めでなくなる程度は次第にひどくなる、これを俗にいうマンネリズムというのであろう。

そのような意味で、私にとって気になる「始まり」も私の幼稚園時代には、気づかぬ「始まり」であったようだ。それは始まりの後に続くものがすべて新しいことであり、好奇心のようなものが私を支えていたからだと思う。しかし、その気づかぬ「始まり」も私の好むと好ま

ざるとにかかわらず、周囲の大人から一つのものの区切りとしての「始まり」を意識させられるようになってきて以来、私にとって「始まり」が気になるようになってきた。

休みが終わって幼稚園が始まったり、朝が来て幼稚園へ行っても、友だちと遊べるという喜びがあっても、あらたまって以前とちがった気持ちで友だちとつきあおうという気はさらさらなかったように記憶する。いいかえれば、常に前向きの連続した幼い人生が送られていたような気がする。だから、朝が来たから新しい一日が始まるのだというより、ごく自然に生活が始まっているというようだった。

ここまで私の幼いころをふりかえった時、ふと思い出したのは、倉橋惣三先生の幼稚園真諦の一節の「朝は先ず自由遊びから始められるのが幼稚園として自然でしょう」という言葉であった。先生のこの言葉の裏には、幼児がいつでもよどみのない連続した生活の中に生き、自分の生活は瞬時に新たな方向へと広がり、それをさえぎってしまうことは、幼児の成長を失なうことになるという心があったのではなかろうか。だからこそ、先生は、幼稚園の朝の会集が始まりと考える教師の愚をさとされているのではなかろうかと思いめぐらすのである。いいかえると、幼児には気づかぬ始まりが常にあり、その中で生活していると考えてさしつかえないのではなかろうか。

大人はとかく「始まり」を気にして、前日までの自分の所業の悪い部分を忘れるために、気になる「始め」を設け、マンネリズムの免罪符さえも手にしようとするように思えるのである。もし、教師が前日までの自分の無為をかき消し、気になる「始まり」を常に作って、子どもたちに、「お始まりですよ」と呼びかけているとすれば、これまた、大人のマンネリズムの切りぬけ方を幼児に教えているようで、何かしら変な気持ちになってしまうのである。

気づかぬ「始まり」を私の生活の中にもう一度取りもどしたいと思いつつ、明日からはと気になる「始まり」を作るのが、私の日々なのである。

（広島大学）